



## Top News

### WORLD OCEAN SUMMIT に出席して

高 清彦 (国際・企画・財務担当理事, フューチャー・エナジー・コンサルタント株)



2月23日～24日の2日間に渡ってインドネシアのバリ島で開催された WORLD OCEAN SUMMIT にパネリストの一人として参加した。同会議は世界的な経済誌 THE ECONOMIST の出版社が主催して行われたもので、2012年にシンガポールで開催されて以来、今回が4回目の開催となり、参加者も500名以上であった。会議のテーマが海洋に関する広範なものであるため、過去の開催地もシンガポール、カリフォルニア、ポルトガルと海に面し、かつ海洋環境に関心の高い地域となっている。

今回の基調講演は、インドネシアのユセフ・カラ副大統領が行った。インドネシアの人口は2.5億人で、17,000の島を持ち(うち3,000の島には電気が供給されていない)、国土の70%が海であるお国柄であることから、海洋に対する関心と期待が非常に高いことを強調していた。現に、同国は石炭、石油、天然ガスの産出国であるが、近年の経済発展と環境問題に対応する為に、多くの島と瀬が存在することで大きなポテンシャルを有する潮流発電プロジェクトにも着手している。

会議の大きな主題は地球の70%を占める海洋で環境を損ねずに、海洋が持つ経済ポテンシャル (BLUE ECONOMY) をいかに拡大できるかであった。国連が示した SDG(Sustainable Development Goal)を基本に25億ドルと言われている現在の BLUE ECONOMY 規模をいかに拡大出来るかについて、環境保護、資源・エネルギー活用、適切なビジネスモデルの観点からの各種議論が各分科会で行われていた。

私がパネリストとして参加したセッションは“Business so blue”と言う名前で、ENEL,

ALTANTIS RESOURCES, PRINCIPAL POWER などの欧米のエネルギー会社、海洋エネルギー関連技術開発会社とともに海洋エネルギーの可能性に関する議論を行った。私は主に日本のエネルギー政策、海洋エネルギーのポテンシャル、漁業協調対応、商用化に向けた取り組みなどを紹介した。参加者よりは日本の漁業関係者に関する質問などがあったが、相対的に日本の取り組みに関する知見は多くないようで、今後ともこのような機会があれば、日本の情報を積極的に発信する必要性を感じた。また、特にインドネシアをはじめとした ASEAN 各国との知識の共有などを進めることで、海洋エネルギーの市場の広がりも期待できるのではないかと感じた。



図1 WORLD OCEAN SUMMIT



図2 全体会議場の概観



図3 ユセフ・カラ副大統領(インドネシア)の基調講演